を行い，124名（男88名，女36名）の回答を得た．

【結果】糖尿病外来での栄養指導は距離的のみならず，心理的にも近くなり，気楽に聞けるというイメージがあり，75％の患者に好評であった．生活習慣が変わったと答えた患者は93％であった．検査項目ではHbA 1cと体重の減少が有意であった．月別の変動をみても積極的介入を行わなかったH14年の同時期に比し，有意に低かった．栄養指導の希望回数は2～3カ月毎が多かった．

【結語】栄養指導室が近接したことにより積極的介入が可能となり，HbA 1cの改善のみならず患者のQOLの改善に役立った．セルフケア行動が低い食事療法には積極的な頻回介入が必要，かつ有効と思われた．

3　超速効型インスリン治療への転換 高齢者への超速効型インスリン・ディスポーザブル製剤導入の効用

松田　香子・片桐　　歩・青木　祥子
矢代　牧子・渡辺　七朗・八幡　和明
新潟県厚生連長岡中央綜合病院薬剤部

【目的】手技の煩雑さや時間的制約から，導入を躊躇していた高齢の患者における超速効型インスリンのディスポーザブル製剤導入の効用について検討した．

【方法】2003年10月までに超速効型インスリンのディスポーザブル製剤での治療を導入した患者47人のうち，65歳以上の患者29人を対象とした．患者背景はカルテにて調査し，血糖コントロールの改善状況は導入方法，病型，罹患期間，注射回数及び併用薬剤で検討した．

【成績】対象患者29人のうちわけは，男15人，女14人．糖尿病型は1型2人（6.9％），2型25人（86.2％），その他2人（6.9％）（膵性，ステロイド性）．導入時の平均年齢は1型74.0才，2型72.6才，その他67.0才．罹患期間は1型12.0年，2型17.0年，その他0.7年．注射回数は，1回注射が12人．2回6人，3回10人，4回1人．導入時平均HbA 1c評価群の改善度においては全体の平均HbA1cは1.8％の改善，患者数では29人中24人（82.8％）が改善した．

【結語】罹患期間も長く，経口血糖降下剤だけではコントロールしきれない高血糖に陥った高齢者の患者に対して，超速効型インスリン治療の導入は血糖コントロールの改善に十分効果を発揮する事がわかった．

4　Madelung病（良性対称性脂肪腫）を合併した2型糖尿病患者の1例

山本　佳子・小田　雅人・戸谷　真紀
田村　紀子・田中　直史
新潟市民病院第2内科

症例は51歳の男性．既往歴としてアルコール依存症がある．

平成12年に頚部腫瘤が出現し摘除術を施行され，この時糖尿病と肝機能障害を指摘される．糖尿病に対しては1ヶ月で治療中断となった．平成15年10月に再び頚部腫瘤が出現し，耳鼻科にて高血糖・高脂血症を指摘され，術前コントロール目的に当科入院となった．前回の組織診断はリポーマであり，今回も画像診断よりリポーマであったためマデラング病と診断した．マデラング病とは良性対称性脂肪腫とも呼ばれ，現在までに約200症例の報告がある．非被包性皮下脂肪組織の進行性増殖が特徴で，主に首から肩にかけて対称性に脂肪が蓄積する疾患である．原因は不明であるが多くの症例は過去に大量の飲酒歴があり，糖尿病との関係も否定できない．本症例では糖尿病に対して内科的治療を行ったが，頚部腫瘤は軽快せず今後は手術予定である．今回まれな疾患を経験したので報告する．

5　糖尿病教育入院の体組成変化の評価 ― インボディの結果から ―

岡田　節朗・高橋　博幸
下越病院

【目的】糖尿病患者の教育入院中の筋肉量の変化を検討

【対象】男 17名 59.1±7.4 女 11名 58.6±8.3

【方法】入院初日，10日目，高精度体成分分析装置により筋肉量の変化を測定.

【結果】男女とも全員では，有意な筋肉量の増加は認められなかった．男8名で有意に増加．59歳以下で筋肉量増加者は多かった.

【考察】有酸素運動のみならず，低負荷のレジスタンストレーニングも有用．一日一万歩のウオーキング，ストレッチングとレジスタンストレーニングの20分程度でも筋肉量が増加する傾向がみられた．高齢者，女性にも有効なトレーニング方法を検討していく.

【まとめ】壮年男性では，筋肉量の増加が期待できる.

6 Urosepsisをきたした糖尿病の1例

伊藤 崇子・小林あかね・小林 千晶
鈴木亜希子・平山 哲・羽入 修
鈴木 克典・相澤 義房
新潟大学大学院医歯学総合研究科
内分泌代謝分野

症例は74歳男性．主訴は発熱，意識レベル低下.

1982年に糖尿病と診断され内服治療を開始されたが血糖コントロールは不良であった．2003年3月の直腸癌手術後から神経因性膀胱を発症し，間欠的自己導尿を開始した．2003年11月，40度台に熱発したが，3日間自宅で放置．意識レベルが低下したため緊急搬送．CT上急性腎盂腎炎と診断され入院．急性腎不全，DICを合併し，CHDF・PMXにて加療した．入院時の血液培養からはklebsiella pneumoniaeが検出された．糖尿病患者では感染症の罹患率が高く，死因の第3位を占めている．そのなかでも尿路感染症が最多であり，平素から無症候性細菌尿を合併している患者が多い．予防的な抗生剤投与の効果については現時点では明確なevidenceがない．神経因性膀胱を合併した無症候性細菌尿症例には，より厳格な血糖コントロールと有症状期早期の抗生剤投与が不可欠と考えられた.

7 膿胸を繰り返した1症例

森川 洋・樋口 昇・渡辺 資夫
桑原 治・仲丸 司・鈴木 善幸
佐藤 幸示
県立小出病院

症例は70歳，女性．55歳時に糖尿病と診断されその後，近医にてインスリン注射にて血糖コントロールされていた．68歳時に外傷性くも膜下出血，その頃より痴呆出現し血糖コントロール不良となる．70歳時，意識障害にて来院（HbA 1c 6.5％），胸部レントゲン写真にて右肺の胸水を認めた．検査にて膿胸と診断しドレナージ・抗生物質にて治療した.

約1年後の72歳時，呼吸苦にて再び来院（HbA 1c 11.5％），胸部レントゲン写真にて左肺の胸水を認めた．検査にて膿胸と診断しドレナージ・抗生物質にて治療した.

約1年の間に両肺の膿胸を発症したコントロール不良糖尿病患者の1例を経験したので報告する.

8 新潟市における学校糖尿病検診の経過と問題点

菊池 透・長崎 啓祐・阿部 時也
川崎 琢也・田中 収・大川 賢一
庄司 義興
新潟市医師会学校糖尿病検診判定委員会

新潟市では，昭和57年度から学校腎臓病検診時に尿糖検査を加え，学校検尿糖尿病検診を開始した．学校保健法に尿糖検査が取り入れられた平成6年度以降は，学校糖尿病検診検討委員会を設置し，メディカルセンターでの1次精検を開始した．平成15年度までに，1次検尿をのべ1,231,662人を受診し，1型糖尿病4名，2型糖尿病44名，境界型糖尿病16名が発見された．2型糖尿病の発見率は平成6年以降急増し，小学生で10万人あたり約2名，中学生は約14名であった．発症率の増加に加えて，メディカルセンターでの1次精検